



君に届け

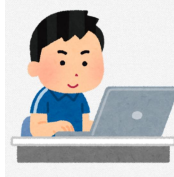
カラー版やバックナンバーは「ホームページ」で検索

令和7年9月25日
校長 菊川 靖浩
熊本市西区小島8丁目17-1
TEL 329-2792
FAX 329-2817

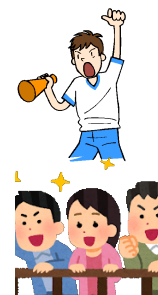
<青学マネージャーは社会でも通用する>

今回は青山学院の原監督の奥様の原美穂さん著『フツの主婦が、弱かった青山学院大学陸上競技部の寮母になって箱根駅伝で常連校になるまでを支えた39の言葉』の中から抜粋して紹介します。

箱根を走りたい、と青山学院大学陸上競技部の門を叩いた子のうちの何人かは、競技人生の半ばでマネージャーに転向します。もちろん自分からマネージャーになると言い出す子は、ほとんどいません。たいていの子が、監督からマネージャーになることを勧められ、まだまだ走りたい、マネージャーにはなりたくない」と拒否し、抵抗してからマネージャーになります。やはりみんな、最後の箱根駅伝が終わるまで、ランナーでいたいのです。そうやってマネージャーになった子の一人が、あるとき、こんなことを言いました「マネージャーになって、初めてわかったような気がします。もし選手のときにこの精神状態を手に入れていたら、もっといいタイムが出せたと思います」彼はマネージャーになって、それまでのマネージャーがどれだけ自分たちを支えてきてくれたかを理解したのです。それまで主観的にしか見ることでできなかった選手を客観的に見られるようになって、たしかにガミガミいう監督のほうが正しくて、選手のほうがサボっているなどか、この選手はこのままではダメだなというようなことが、見えてくるようになったと言います。もしも選手時代、自分が周りからどう見えていたかがわかれば、努力が足りていないこともわかったらと言うのです。彼だけでなく、マネージャーになった子は驚異的なスピードで成長します。マネージャーにはマネージャーの資質を持った、性格のいい賢い子しかありませんが、その彼らがさらに成長するのです。極端な言い方をすれば、選手は練習がつかなくてもタイムを1秒でも縮められれば、頑張ったと認められます。でもマネージャーは違います。自分のためではなく、選手のために考えて動くことが求められます。自分は走りたくても絶対に走れない箱根を、誰かに走ってもらうために行動している。このことも、してもらって当然と思ひ、マネージャーから支えられていることを実感している選手はほとんどいないはずで、青学のマネージャーは社会でも通用する。これは、会社やご家庭でも似たようなことが言えるのではないかと思います。支える側と、支えられる側。マネージャーはその両方を経験するので、目標に向かって努力するつらさも、それを支えるつらさも、走ることで得られる喜びも、誰かを勝たせるという喜びも、立場によっていろいろな感情があることを理解します。だから成長するのでしょうか。若くしてこういった経験をした彼らは、きっと社会に出てもしっかり通用するだろうと思います。私も、学生を支えることで多少なりとも成長できたのかなと思います。



私はこの話を読んで、昔の中体連の一場面を思い出しました。その部活動は、九州大会に出場するほど強豪で、部員数も非常に多い部活でした。市の中体連は順当に勝ち上がり、県の中体連に出場しました。しかし大会当日ベンチに入っているのはスキルが高い2年生がほとんどで、3年生はあまりいませんでした。ベンチに入れなかった3年生の心境を案じながら、体育館の2階で応援してる3年生を見ると、他にベンチに入れなかった下級生と共に、声をからして一生懸命応援する姿がありました。さらに驚いたのは、ベンチに入れなかった3年生の保護者が、子どもたちよりも大きな声で下級生を応援していたのです。その姿を見て、チームの一員としてのあり方とは何か、親はどうあるべきか、など深く考えさせられました。



あの子たちも、今頃、どこかで職場の一員として立派に頑張っていることだと思います。

<祝！西部地区大会 2年連続優勝>

9月20日(土)は女子バレー部の西部地区大会でした。午前中はリーグ戦が行われ、本校は上位トーナメント進出し、上位トーナメントでは全試合とも2-0で勝ち、優勝しました。どの試合も逆転に次ぐ逆転で、激闘と呼ぶにふさわしい試合でした。この優勝には3年生やその保護者を含む盛大な応援が後押ししたことも大きかったと思います。バレー部の皆さん、V2本当におめでとうございます。



次回は、10月6日(月)発行の予定です。